

# ゼロ初級の生活者のためのカリキュラム作成

にほんごきょうしつカムカム代表 服部 智子

## 1、活動の概要と目的

2022年に立ち上げたボランティア団体「にほんごきょうしつカムカム」の目的は、「外国人住民のための無料の日本語教室」と「外国人住民と日本人住民の交流」の2つ。当初は月に2回の大人対象の日本語教室と年に2~3回のお茶会やcookingなどの交流イベントを行った。日本語教室の需要が大きいこと、ボランティアが増えたことなどから、2025年度は毎週日曜日の午前中に「おとなクラス」、午後に「こどもクラス」を開催。現在は更に活動を広げるため、団体のNPO法人化を申請中。

## 2、課題設定の背景

活動地域は愛知県弥富市。弥富市は人口約43,400人、外国人は約2,900人で割合は6.6%。隣接する地域も外国人住民の割合が高く、飛島村は11.4%、三重県木曽岬町は11.8%。外国人の割合はそれぞれの県の中でも高いが、町の規模は小さく、3市町村とも日本語教室空白地帯であった。

弥富市の外国人住民の3分の1はベトナム人で、ブラジル人、パキスタン人、フィリピン人、中国人と続く。特徴としては、製造業で働く人に加え、ベトナム人・パキスタン人を中心に「技・人・国」の在留資格で働き家族を呼び寄せる人が増えている。また、自動車や自動車部品の輸出を行う南アジア・中東・アフリカなどの人々が多い。

「おとなクラス」では、多くて15人ほどだった学習者が急増し、25人を超えるようになる。1対1で学習するにはボランティアの数が足りない上に、ボランティアでは教えるのが難しいゼロレベルの学習者が増加し、このままでは教室として成り立たなくなるという危機感を抱く。そこで、日本に来たばかりで、もちろんひらがなも読めないゼロ初級の学習者のためのカリキュラムを作成することにした。

## 3、実践活動計画での課題

- ① ゼロ初級の学習者を授業形式で教えるためのカリキュラムの作成
- ② 授業形式のクラスを数人のボランティアが交代で教えられるようにすること→今後の課題
- ③ 新規学習者クラス分けのための簡易な評価ツールの導入→「とよた日本語学習支援システム」利用

## 4、実践課題①の実施状況

### 1) 6月から(第1期)

これまでゼロ初級の学習者は、子ども向けのテキスト「あのね」(NPO法人プラス・エデュケート・市販されていない)を使ってボランティアと1対1で学習していた。「あのね」は、ひらがなが読めなくても絵を見て会話練習ができるのでゼロ初級の学習者にとって学習しやすく、また、ボランティアにとっては教えやすいテキストである。しかし、子どものために作られたテキストであるため、学校用語・教科用語など大人には必要ない内容も入っている。一方、市販のテキストの多くは文字学習が前提となっている。しかし、生活者にとって文字習得のハードルはかなり高い。来日直後に「まずは簡単な会話を勉強したい」と思う生活者が、文字学習を前提とせず日本語の基礎的な文型を短期間で学び、その後の日本語学習につなげられるような授業形式のカリキュラム作成を目指した。

カリキュラム作成でもう一つ考慮したのは、毎回のように新しい学習者が入ってくること、仕事や家庭の用事などで毎週は参加できない学習者が多いこと。また、日本語を学びたいと教室に来てくれた学習者を断ったり、待たせたりしないこと。

テキスト「あのね」を基に1回完結の13回のカリキュラムを作成。更に文型シート・語彙シートを毎回作成・配布し、絵を見て語彙がすぐ理解できるような語彙の絵カードも400枚近く作成。授業形式の「はじめてクラス」をスタート。

「はじめてクラス」は、学習者の人柄もあり、学習者同士が教えあい、ほめあえるととても楽しいクラスになっている。これまでやってきたボランティアと学習者1対1の学習は、手厚い反面ボランティアが一方向的に教えがちであること、学習者同士の接点がないこと、学習者が日本語学習の難しさを共有できないことなどのマイナス面があったことに、授業形式にしてみても初めて気づいた。

## 2) 9月から(第2期)

9月からは第1期の反省点を改良した12回のカリキュラムで第2期を開始。改良するとき考えたのは、90分の授業に内容を詰め込み過ぎないこと、生活者にとって必要な内容だけに絞ること、初めて参加した人でも学びやすくすること。クラス運営では、ゼロ初級のクラスといえど少し分かる人と全くゼロの人とが混在するため、ボランティアが入った3~4人グループでの会話練習の時間を長めに取り、それぞれのレベルにあわせた練習をしたり、疑問を解決したりした。また、文型シートや語彙の絵カードをホワイトボードに貼り、文型や語彙を覚えながら前を見て発話できるように工夫した。

## 3) 現在感じている課題

グループでの会話練習でボランティアが文型や語彙を自由に使ってしまうこと。ゼロ初級の学習者が混乱しないようボランティアへの学習会が必要。また、ボランティアが何気なく外国人の文化や習慣の違いを話題にする際、意図せず差別的に聞こえることがある。多くの外国人と身近に接する私たちは特に発言に気を付けなければいけないこと、本人の前で言えないことは本人がいない所でも言ってはいけないことをボランティア全員に理解してもらう必要があると思う。

## 4) とてもうれしかったこと

ベトナム人の元学習者が「ボランティアとして参加したい」と言って久しぶりに来てくれたこと。自分の日本語学習経験から学習者や私たち日本人ボランティアにもアドバイスをしてもらえる貴重な人材となっている。外国人がボランティアとして参加することは、今後活動を広げる上で大きなプラスになると思う。

## 5、今後の取り組みについて

1月から第3期がスタート。毎回来られない人、ゆっくり学びたい人は12回のカリキュラムを2期、3期と学習して日本語に慣れ、本人が次のクラスへ行きたいと思った時にクラスを変われば良いと考える。

団体としては、現在の日本語教室を継続しながら、日本語教室以外の新しい活動も始めていきたい。

## 6、まとめ

コーディネーターとしては、まず様々な人と話し、意見を聞くこと、情報を集めること。そして、集めた情報の中から地域の現状・ニーズを考慮し、学習者の意見も聞きながら活動内容を考えること。その上で、それを多くの人に伝えて市民参加を促し、活動につなげることが重要。また、活動していく上では学習者とボランティアの垣根をなくし、みんなが楽しく勉強し、楽しく活動できるよう心掛けたい。